

第34回全国バズ学習研究大会分科会記録のまとめ

第1分科会

提案後、質疑・協議を参会者（助言者も含めた）グループ討議（buzz session）

提案 ピア・サポートについて

- ① 児童一人一人への関わりの時間の持ち方について
- ② トレーニングの導入と説明はどのようにしたか。モチベーションの維持の仕方。
- ③ Q-Uの結果、学級に十分満足していない児童への教師の対応について
- ④ どこでピア・サポートを知ったか。
- ⑤ ピア・サポート準備期間はどのくらいか。

・ピア・サポートは、カウンセリング手法を用いる新しい手法である。先生の代わりに行っていたが、カウンセラー役(聞き役)が伸びるため積極的に取り入れられるようになった。

長所： 経験が共通している。共感し易い。

短所： 専門的訓練を受けていない。限界を明確にしておく。

教える側も学ぶことの意識をもつ。

・学校は、人が共に生活しているところ。友だちよさを認め合い、生きる力をつけていくところである。

- ・一人一人の考えを大事にし、個人のよさを褒める。→自己存在感を高める
これらを授業、遊びの中で子どもたちに伝えていく。

提案 低学年における班活動の工夫

- ① なぜ蚕からスタートしたのか
- ② 算嫌いの原因一探り。クラスの個別指導の仕方。
- ③ 各教科ごとに班が違うが。

基本的には生活班を活用。教科の内容によってはそれに適した班を作って活動させている。

- ・低学年でも、給食以外に各教科での班の使い方がよく分かった。
- ・はじめ仲良しで班決めをしていたようだが、子どもたちの中からグループ分けについての意見—仲間から疎外される心配がある—が出されて、それ以後くじびき等で行っているという。低学年の場合でも考えているのだなと思った。
- ・低学年の班活動で特に次のことが大事である。

①役割をはっきりさせる ②課題を分かりやすく見通しを持たせる ③一人一人の考えを大事にする

- ・教師も含めた信頼し合う関係を創り上げようとする教師の意識改革が必要である。

第2分科会

提案後、質疑・協議を参会者（助言者も含めた）グループ討議（buzz session）

提案 算数科における学習指導の改善

- ⑥ 算数科で実践しているが、他教科への波及は→体育科で実施している。
- ⑦ 認知的目標、態度的目標を子どもたちはつかんでいるか→つかんではないがそれでも良い。
- ⑧ 子供同士の教え方については指示しているか→特にしない。しかし、押さえるところは押さえて子供たちに任せている。
- ⑨ 早くできた子はあきないか→あきる子もいるので、更なる手立てが必要である。なお、「間違っても良い」ということは繰り返し言っているので、子どもたちは思い切ってやっている。
- ⑩ 学習班と生活班との関係。「教えたい・教わりたい」子どもが決まってこないか→班の関係は全くない。教えたい子が増え、「教え合いたい・教わりたい」が減少。

提案 未来を育てる社会科学習

- ④ ポスターセッションの方法は→1人5分。書き方は子どもの考えで。他の子どもが評価し、発表者に提出している。
- ⑤ バズを使って最も良かった点は→ポスターセッション「みち」の名前を考えるときにバズを行った。互いの意見を出し合いながら目的意識が個々に明確になった。
- ⑥ グループ分けの方法と課題は→校区探検のとき通学路ではない範囲を選択し、その中から好きな「みち」を1人1つ決めた。

基本的には生活班を活用。教科の内容によってはそれに適した班を作って活動させている。

・バズ学習は形ではない。形にこだわらず、蓄積されて出てくるものである。個別化でも十分通じる指導法である。

・教科で伸ばした力とバズ学習で伸ばしたい力には、重なる部分が相当にある。多様性を互いに認め合っていくこと。これがバズ協同学習である。さらにふくらみがあると、もっと素晴らしい。

・児童・生徒相互と教指の信頼関係がよくなること。絶対評価にバズ学習で身についた力の評価も、保護者の方々に理解していただけるようにしたい。

第3分科会

提案後、質疑・協議を参会者（助言者も含めた）グループ討議（buzz session）

提案 全員参加の授業を目指して

- ① 少人数の編成に伴う、各グループの授業内容は。また、教材は同じか
- ② 子どもが主体であったが、指導の主体としての教師の道筋のつけ方が甘かったのでは
- ③ グループ別の課題学習とどう違うのか、子供同士の教え方については指示しているか
- ④ 班長やリーダーをどう決めるか。子どもたちの相互評価を具体的に
- ⑤ バズ学習を他の教師もやっているか

提案 基礎基本が確実に定着する授業

- ① バズ学習への関心と地域性について
- ② 適する教科と工夫を必要とする教科は→バズ学習では多様な形態が考えられる。
- ③ 基礎・基本を4観点で検証している
- ④ リーダーは→学校あげてバズ体制で行っているのでリーダーは分散している。
- ⑤ 小学校との関連を知ることにより教材の選び方と工夫が必要。

新採2年目の経験者の提案と既に学校体制でバズ学習を進めている教育現場の提案で大変示唆に富む内容であった。

討議で助言者、参会者の意見等を総合すると次のように集約される。

1. 興味を持たせる。自分の考えを持って発表し、他の考えも認めていける授業を実施する。
このことは、一斉指導でもバズ学習や他の指導形態であっても指導の主体である教師が常に心がけなければならない事である。
2. 失敗を恐れず改善していく姿勢が大切。
導入などで、課題意識をもたせる工夫をする。子供たちが考え実行したその結果が失敗であっても、その努力を認めてやる。その失敗が有力なフィードバック情報となり、成就の実感をもたせる。教師自身その失敗に対処できる柔軟性を持つことが大事だ。
3. グループの学習形態で大切なことは、子供たち一人一人の考えを大事にする。
子供たちの考えを一つにまとめがちであるが、構成メンバーの数だけ考えや意見がでる。これらを認め合う態度の育成が大事。教師のこの態度が、友だちの意見を受け入れ対比しながら自分の考えを修正するようになる。この力を身につけさせることが生きる力の育成につながるのである。
4. 話し合い活動を活発に行わせるには教師の課題の出し方の工夫が大切。
ただ話し合いなさい、ではなくて、だれにも分かりやすく何について話し合うのか（課題）を明確にして話し合いをさせる。グループ内の構成メンバー同士の関わり方について十分指導することも大事である。
5. バズ学習を取り入れることにより学習意欲を高めることができる。
待ちの姿勢ではなく、他との協力で課題を解決することの喜びを体験できる。
6. リーダーは特定の子ではなく、教科によって異なるし、1時間の授業の中でも課題によって異なっている。したがって役割意識を高めることを学校生活全般で考慮することが大事。生活班などで、班長以外は輪番制で行うことで十分に役割意識を高めることができる。

第4分科会

提案後、質疑・協議を参会者（助言者も含めた）グループ討議（buzz session）

提案 国語科における協同学習の可能性

- ① 伝え合う力一言葉で自分と相手をつなぐ。また、言葉で課題や問題を解決していく経験をもつ。この多様性に対応するのに小集団の力をフルに活用する。
- ② 学習目標に対して子どもが理解することが出来た。また、13時間の内容をどのように説明したか。評価は→大垣市の年間指導計画により、時間数は教科書に沿っている。A、B、Cで、CはBに引き上げるように検討を加えながら指導中。
- ③ 小中の連携を考慮する→小・中の連携の段差を無くす。小学校の教師から学ぶ。温かい言葉かけ、待つところ。
- ④ 環境を扱う、というのが→総合的学習・社会科・理科との関わりを内容を絞って、教材として扱う。
- ⑤ 国語科で「話し方」「協同学習」などにあまり取り組まれていない。学校生活全体でより良い人間関係を作って行く技能を身に付けさせることが大事である。

単元の終わりのシンポジウム（プレゼンテーション）に保護者や隣のクラスを招待することは素晴らしい。

提案 トライやるウィークの実践

- ① 神戸事件をきっかけに小集団での活動を取り入れる→時間数については学校行事との兼ね合いを考慮。予算は県教委で、日程調整は校長会で実施。アンケートによると、勉強より楽しい。通常の授業との関わりを考えるようになり、授業の改善に役立っている。
- ② 教師の思い込みの打破→子どもたちの楽しさ、充実感、やりがいなどを取り上げる。それには学びの指導過程、関心の持たせ方などさらに考えていく。
- ③ 教師の主体的な指導のねらいを具体的に示す→ねらい達成のためのグループ分け。そこで十分話し合わせ、ねらい達成のためのそのグループの課題を設定させる。どのような手順で課題解決の活動計画を立てさせ、実行にかからせる。
- ④ 自己評価について→具体的に書き、次の計画に盛り込むようにさせる。
- ⑤ 総合的学習は基礎学力の充実に活用しても良い。体験だけでなく知識や技能等の基礎・基本を教え込み、さらにその発展を目指していく。これにより「生きる力」がより強固になる。